

## 展望 言葉と文脈

水辺あお

『癌人<sup>ガンマン</sup>のうた』は荒巻和雄氏の遺歌集である。タイトルの「癌人<sup>ガンマン</sup>」という造語に、違和感があった。「癌」を揶揄しているように感じたし、「癌人」のルビが「ガンマン」であり、和語の「ガン」と英語の「マン」のミスマッチが気になった。

『コスモス』二〇二三年十二月号の岡田万樹氏の「終焉をみつめて」や、同年初冬のコスモス短歌会長崎支部の『海港』九十八号の江頭洋子氏の「五つの癌を克服して」は、荒巻氏の闘病精神の逞しさと誠実な人柄を追慕しながら丁寧に評して、わかりやすかった。

江頭氏は「荒巻さんが突然自らを『癌人<sup>ガンマン</sup>』と詠んでコスモス誌に載り驚いた」と記す。ただ、岡田氏も江頭氏も「癌人<sup>ガンマン</sup>」という造語の背景について、ふれなかった。

私の違和感が解けたのは、同年十二月に開かれたコスモス会員著書合同出版記念会だった。記念会で批評紹介者の大松達知氏は、荒巻氏は西部劇が流行った時代の人で、「癌人」はまさに拳銃使いの「ガンマン」の意味だという趣旨の発言をした。

同じ会の鼎談で、高野公彦氏も「夕陽のガンマン」(クリント・イーストウッド主演のマカロニ・ウエスタン)を引用し、「癌人」には癌と戦う拳銃使いの英雄のイメージがあると指摘した。

これらの発言を聞いて、私も、小学生のころ鏡に向かって銃の早打ちのまねごとをしていたことを思い出した。私は荒巻氏より一代下だが、「ガンマン」の記憶を持っており、なるほどと思った。

せとぎはの癌人<sup>ガンマン</sup>ならばその癌を仕留むべしとふ励ましに遇ふ

医師か友人か、あるいは自分自身の声か、瀬戸際にあるガンマンならその敵を仕留めよという励ましの声があったのだ。まさに拳銃使いの心意気だ。

ガンガンガンガンガンと数へて五つまで 癌わづらへば老衰はなし

荒巻氏は、腎盂癌、舌癌、胃癌、肺癌、咽頭癌の五つの癌を患った。「ガン」を五つ重ねたのはその「癌」の数でもあるが、拳銃の音にも聞こえる。そして「ガンマン」は、決

闘て死すとも、老衰で死ぬことを潔しとしなかつた。

癌人<sup>ガンマン</sup>のトリオのひとり先立ちて残るコンピは夜をはしごす

三人の「ガンマン」仲間のひとりが先立ちてしまった。残る二人で夜の街をはしごした。孤高のガンマンの友情は篤い。遺歌集をまとめた睦代夫人はあとがきで、以下のように記した。

「歌集名は『癌人<sup>ガンマン</sup>のうた』としました。夫が晩年、癌と闘う自分自身を揶揄しながら、たびたび歌にこの造語を使っていたことを思い出すからです。」

荒巻氏が揶揄していたのは癌患者となった自分自身であり、揶揄することで自らを励まし、周囲を安心させていたのだ。

古希、喜寿といつきに過ぎて傘寿越え前科五癌が生かされてゐる

「前科五癌」の造語も荒くれ者の「ガンマン」らしい。

「癌人<sup>ガンマン</sup>」という造語に出会い、違和感をもったことで私は、言葉の意味やニュアンスは言葉そのものが単独でもしだすこともあるが、それより、一首全体、歌集全体、歌人の全人生という、大きな文脈から生まれるべきだという思いを強くした。